

論点

現在の論争をみるにあたつて

たつていたことは、重要な事実である。しかし、「新中等階級」の「擁護」より、じつさいはもっとむきだしに軍国主義支配が強化されるなかで、そのまま侵略戦争に突入してしまつた。

五〇年代半ばからの

「新中間階級」論

第二回は、この侵略戦争をあいだにはさんだ約二十年後、一九五〇年代半ばから六〇年代にかけての時期である。日本の独占資本の復活にともない、一方ではサラリーマン層のかつてない拡大がはじまることも、他方ではかれらの新たなプロレタリア化の過程がすすみ、百貨店から銀行、証券取引所などまで、労働組合の運動が急激な前進をみせるようになった。

一九二〇年代半ばから三〇年代へかけて
第一回は、世界大恐慌の後、一九二〇年代半ばから三〇年代にかけての時期であった。当時、この問題について科学的社会主義の立場にたつとすると人びとの理論水準は、かならずしも高いものではなく、中間階級の「滅亡」という一面的な主張に陥りがちであつたが、深まりゆく危機のなかで、サラリーマン層やインテリゲンチヤの没落が論議されはじめたのである。一方、一九三五年に、東京府「中等階級生計費調査」の報告書は、支配階級の立場を、すでにつぎのように述べていた。

「現時の中等階級の存在は、健康なる社会発達のため重大なる意義を有す。而して、旧中等階級の減少に伴ひて、日々に増加しつつある新中等階級、即ち有識無識の精神的・技術的労働者、換言すれば、俸給生活者階級、此等階級の擁護は、現時特に緊急の問題なりとす」

半世紀も前のわが国で、右のように「中等階級」が問題とされるにいたつては、重要な事実である。しかし、「新中等階級」の「擁護」より、じつさいはもっとむきだしに軍国主義支配が強化されるなかで、そのまま侵略戦争に突入してしまつた。

中間階級論の歴史的性質



田沼肇

「ホワイトカラー」の「ブルーカラー」化こそが問題の焦点ではかならないことを強調したのである。

政治的に利用された今回の論争

中間階級をめぐる論争がさかんになった第三回の時期は、一九七〇年代にはいつてから、今日にいたるまでの間である。「高度経済成長」政策の矛盾が露呈し、国民の多数のあいだに革新のための合意を形成していく動きが芽生えてきたなかで、しだいに「九〇年・新中間階級」論が、前面に押しだされてきた。

たとえば総理府世論調査にたいし、中々程度の生活を受けていると答えたものの割合を基礎にして、国民の九〇年（少なくとも六〇年）までが「新中間階級」であり、かれらは、政治的には「中道」を求めるといふ趣旨のものである。もちろん、「高度経済成長」がもたらした大量消費の進展や、生活様式の「近代化」、「均質化」などは、独占資本主義の大量生産がひきおこした、ひとつの新しい生活現象ではあつても、けつして労働者階級の多くが中間階級化したことを意味するわけではなかつた。また、教育

水準の上昇といつても、大学卒業者の「ブルーカラー」化までが問題にされるような時代である。

さらに、とりわけ昨年一年間をつらうじ、「新中間階級」論にたいして、多くの論者が批判してきたとおり、年収が百万円に満たない人びとでも、その半数はかくが「中」程度の生活を享受していると答えているようなデータや、「輪郭の定かならずぬ集合体」としての「新中間階級」規定の意味、生活程度に関する意識調査から「新中間階級」の成熟という結論をひきだす無理な論法、階級論として資本家階級でも労働者階級でもない中間層を研究するのはなく、いわゆる「社会階級」としての「中間層」を問題にするといったことなど、「新中間階級」論は理論的にあまりにも粗雑だといわなければならなかつた。したがつて、さいきんみられる「新中間階級」論の流行は、これまでもまして、政治的に利用されている面が強いのである。

「潜在的に現状批判的な」新中間階級

実証的に論述する立場をとつていふ山口定「政治転換と中間層問題」（『世界』一九七七年一〇月号）も、「九〇年・新中間階級」論が脚光をあびる端緒をつくつた「政策構想フォーラム」の提言「脱『保守』時代の政治ビジョン」（一九七六年二月）にたいして、つぎのように評した。

「これまでの中間層問題に関する社会科学の蓄積を無視した新しい概念の不用意な提示によつて

無用な混乱を招く……」

「新中間階級」の肥大化による多党化の説明といふよりは、正確に読めば、むしろ、この多党化を媒介にして日本の政治が向うである、むしろは向うべき方向の提示といつてにあらんと考えられる。

新しい年——一九七八年を、第二次大戦後もつと深刻な経済危機のなかで迎えるにあたり、「新中間階級」論は、きびしい客観情勢からみて、尻つぼみになつていくと考へてよいであらうか。否、けつしてそうではないように思われる。なぜなら、さいきんの「新中間階級」論そのものが、「新中間階級の性格は二面的」であり、かれらは「潜在的に現状批判的」であつて、「生活安定化をめざす集団となる可能性」をはらんでいるとみており、むしろ、こうした「新中間階級」を、いかにして革新的方向から断つるかに、議論の中心があるからである。さいきの山口氏も、「今日の日本において、新中間階級」一般に「利益保身性」「現状維持」「保守」への傾斜があるとするのは事実を偽るもの」と指摘しており、この点をめぐる争点は、いつぞうクロス・アッパツされてはいるにちがいない。

われわれは、ひきつづき「新中間階級」論の欺瞞（ぎまん）を暴露し、労働組合の運動を全体として劣屈させるためにも、サラリーマン層の意識と行動の特質についての研究をもつとすめ、さうにはならぬの中間階級とくに都市自営業者のもつ役割のわが国における重要性を深く認識し、大多数の国民を結束しうる革新統一戦線の基盤を、いさううリアルに解明していかなければならない。（たぬま はじめ・法政大学教授）